

特許協力条約

発信人 日本国特許庁 (国際調査機関)

代理人

三好 秀和

あて名

〒105-0001

日本国東京都港区虎ノ門1丁目2番8号 虎ノ門琴平タワー



様

Written Opinion of the ISA

PCT

国際調査機関の見解書
(法施行規則第40条の2)
[PCT規則43の2.1]

発送日

(日.月.年)

24.5.2005

出願人又は代理人

の書類記号 JICH-15-PCT

今後の手続きについては、下記2を参照すること。

国際出願番号

PCT/J P 2005/001612

国際出願日

(日.月.年) 03.02.2005

優先日

(日.月.年) 06.02.2004

国際特許分類 (IPC) Int.Cl.⁷ C02F3/00, A01K63/04, C02F3/34

出願人 (氏名又は名称)

株式会社 高千穂

1. この見解書は次の内容を含む。

☒ 第I欄 見解の基礎

☐ 第II欄 優先権

☐ 第III欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解の不作成

☐ 第IV欄 発明の単一性の欠如

☒ 第V欄 PCT規則43の2.1(a)(i)に規定する新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についての見解、それを裏付けるための文献及び説明

☐ 第VI欄 ある種の引用文献

☐ 第VII欄 国際出願の不備

☒ 第VIII欄 国際出願に対する意見

2. 今後の手続き

国際予備審査の請求がされた場合は、出願人がこの国際調査機関とは異なる国際予備審査機関を選択し、かつ、その国際予備審査機関がPCT規66.1の2(b)の規定に基づいて国際調査機関の見解書を国際予備審査機関の見解書とみなさない旨を国際事務局に通知していた場合を除いて、この見解書は国際予備審査機関の最初の見解書とみなされる。

この見解書が上記のように国際予備審査機関の見解書とみなされる場合、様式PCT/ISA/220を送付した日から3月又は優先日から22月のうちいずれか遅く満了する期限が経過するまでに、出願人は国際予備審査機関に、適当な場合は補正書とともに、答弁書を提出することができる。

さらなる選択肢は、様式PCT/ISA/220を参照すること。

3. さらなる詳細は、様式PCT/ISA/220の備考を参照すること。

見解書を作成した日

06.05.2005

名称及びあて先

日本国特許庁 (ISA/J P)

郵便番号100-8915

東京都千代田区霞が関三丁目4番3号

特許庁審査官 (権限のある職員)

増田 亮子

電話番号 03-3581-1101 内線 3421

4D

9267

様式PCT/ISA/237 (表紙) (2004年1月)

第1欄 見解の基礎

1. この見解書は、下記に示す場合を除くほか、国際出願の言語を基礎として作成された。

☐ この見解書は、_____ 語による翻訳文を基礎として作成した。
それは国際調査のために提出された PCT 規則 12.3 及び 23.1(b) にいう翻訳文の言語である。

2. この国際出願で開示されかつ請求の範囲に係る発明に不可欠なヌクレオチド又はアミノ酸配列に関して、以下に基づき見解書を作成した。

a. タイプ ☐ 配列表

☐ 配列表に関連するテーブル

b. フォーマット ☐ 書面

☐ コンピュータ読み取り可能な形式

c. 提出時期 ☐ 出願時の国際出願に含まれる

☐ この国際出願と共にコンピュータ読み取り可能な形式により提出された

☐ 出願後に、調査のために、この国際調査機関に提出された

3. ☐ さらに、配列表又は配列表に関連するテーブルを提出した場合に、出願後に提出した配列若しくは追加して提出した配列が出願時に提出した配列と同一である旨、又は、出願時の開示を超える事項を含まない旨の陳述書の提出があった。

4. 補足意見：

第V欄 新規性、進歩性又は産業上の利用可能性についてのPCT規則43の2.1(a)(i)に定める見解、それを裏付ける文献及び説明

1. 見解

新規性 (N)	請求の範囲	7, 9	有
	請求の範囲	1-6, 8	無
進歩性 (IS)	請求の範囲		有
	請求の範囲	1-9	無
産業上の利用可能性 (IA)	請求の範囲	1-9	有
	請求の範囲		無

2. 文献及び説明

文献1 ; WO 01/70637 A1 (科学技術振興事業団) 2001.09.27 & EP 1270517 A1 & US 2004/0084376 A1

文献2 ; JP 2000-153293 A (日立化成テクノプラント株式会社) 2000.06.06 (ファミリーなし)

文献3 ; JP 11-114593 A (有限会社オフィスホソヤ) 1999.04.27 (ファミリーなし)

文献4 ; JP 2002-273471 A (株式会社四電技術コンサルタント) 2002.09.24 (ファミリーなし)

(1) 請求の範囲1-6, 8に係る発明は、国際調査報告で引用された文献1及び2から新規性も進歩性も有さない。文献1には、澱粉含有量が60重量%以上で水に対する溶解性が低く、多孔質である、澱粉由来の生分解性プラスチックを炭素源及び脱窒菌の固定化担体とし、硝酸態窒素に汚染された地下水を浄化すること、及び菌体の固定のために乾燥した担体を投入することが開示されている。

また、文献2には、排水の嫌気処理槽に、澱粉等の天然高分子系で、多孔質体に加工された生分解性プラスチックを固定床とすることが開示されている。文献1及び2において、澱粉のC/N比は6以上である。

(2) 請求の範囲7に係る発明は、国際調査報告で引用された文献1-3より進歩性を有しない。文献1及び2と文献3の発明は脱窒反応に必要な炭素源を添加するという点で同一の技術課題を有する。文献1及び2の発明の生分解性プラスチックを、その共通する技術課題を解決するために、文献3に記載された、観賞魚用の水槽に配置する炭素源として用いることは、当業者であれば容易に想到し得たものである。

(3) 請求の範囲9に係る発明は、国際調査報告で引用された文献1-4より進歩性を有しない。文献1及び2と文献3及び4の発明は脱窒反応に必要な炭素源を添加するという点で同一の技術課題を有する。文献1及び2の発明の生分解性プラスチックを、その共通する技術課題を解決するために、文献3及び4に記載された、貧酸素領域内に配置する炭素源として用いることは、当業者であれば容易に想到し得たものである。

第Ⅳ欄 国際出願に対する意見

請求の範囲、明細書及び図面の明瞭性又は請求の範囲の明細書による十分な裏付についての意見を次に示す。

- (1) 請求の範囲4は「水質浄化用固形材」に係る発明であるが、その添加量を限定することは「固形材」という物の限定として適切でない。